

日本語の「語り」の談話における 相づちの談話展開機能

権 賢珠

キーワード

先行発話－相づち－後続発話・聞き手の働きかけ・相づちの談話展開機能

1. はじめに

日本語の相づちは、「話し手の気分をよくし、話をなめらかに運ばせる役を果すから、談話における最も望ましい態度の一つであり、聞き上手の大切な要素である」『国語学大辞典』（1980）とされ、日本語教育においても相づちを含む指導の重要性が、水谷（1984）、伊藤（1993）、堀口（1997）などにより指摘されている。しかし、松田（1988）の指摘のように、「語形としては簡単な相づちであるが、どういう時に、どういう相づちを使い、なぜ使うのかということ把握し、使えるようになることは容易ではない」と考えられる。

そこで、日本人母語話者が実際にどのような相づちを用いて談話を展開するのかを、「語り」の談話データ¹⁾を用いて分析した。相づちの機能に関する従来の研究では、先行発話と相づちの発話形式に焦点が置かれており、相づちと後続発話の關係に着目した分析はほとんどなされていない。本稿では、主として相づちの後続発話に焦点を当て、聞き手の働きかけによる「相づちの談話展開機能」を明らかにしてみたい。佐久間（1992、2002）の「文脈展開機能」を用いて分析した結果に基づき、「情報を導き出す相づち」と「情報理解を示す相づち」の会話教育への応用を検討することとする。

2. 談話展開上の相づちの機能についての先行研究

相づちの機能に着目した研究は、一つの相づちが複数の機能を兼ねるという指摘もあり（メイナード1993、松田1988）、相づちの定義や機能の分類基準も一様でないのが現状である。また、相づちの使用が相手にどのように作用し、談話の展開にどのような影響を与えるかを解明している研究は少ない。

堀口（1997）は、聞き手の働きかけの一つとして「相づち」を挙げている。相づちと談話展開の關連については、「聞き手は話し手に対していろいろな信号を送りながら話を聞き、一方、話し手はこの聞き手から送られる信号によって、話の進行を助けられたり、時には流れをさえぎられたりしながら話を進めていく」と指摘している。松田（1988）は、堀口（1988）の「①聞いているという信号②理解しているという信号③同意の信号④否定

の信号⑤感情の表出」の機能に、「⑥間を持たせる機能」を加え、「相づちには、積極的に相手に話を進めさせる方向に作用する(①～③の機能)のほかに、④～⑥の場合や、相づちの不使用などによって消極的に作用させることで、反論を述べる緩衝材としたり、相手にさらに説明させたり、話の進む方向を変更させたりするという効果を発揮することができる」と述べている。両氏の研究は、日本語の相づちが談話の展開と何らかの関連を持っていることを認めているが、実証的な研究方法を取り上げているものではない。

佐久間(1992)は、「談話における重要な分析観点」として「接続表現の文脈展開機能」²⁾を提唱している。相づちと接続表現は、それ自体は概念的意味を持たないが、談話の成立に関与している点が共通する。「取り上げた話題を切り変えて、さえぎり、先へと進めて、まとめてしめくくる」(佐久間 2002:164)という談話展開における相づちの研究は、日本語教育に必要かつ重要なはずである。本稿では、佐久間(2002:166)の「接続表現の文脈展開機能」を用いて、相づちの「談話展開機能」の解明を目指す。

3. 談話データの収集方法と分析対象

「語り」の談話の収集は、アニメーションの「ピングーと花瓶」(映像資料A)と、「ピングーと凧」³⁾(映像資料B)の計2資料を用いた。映像資料の長さは2本とも約5分間である。参加者は、親しい人間関係にある20代から30代の大学院生と社会人を対象とした。調査は、次の手順で行った。①映像資料Aの場合は、アニメーションの前半と後半をそれぞれ2分30秒間に分けた。②映像資料Bの場合は、始めから3分40秒間、終わりから3分40秒間に二分して、アニメーションの真中の2分10秒間の映像が、前半と後半で重なる形にした。つまり、映像資料Bは、2人の参加者が2分10秒間同じ映像を観るようにしたが、ビデオの構成については知らせていない。③①と②の調査用のビデオを参加者の2人にそれぞれ渡し、交代で別々に見るように指示した。④ビデオの視聴後に、各自の観た内容について互いに話してもらった。それをビデオカメラとICレコーダーで録画・録音した。

本稿の分析対象は、2人の参加者の対話形式で収集した日本人母語話者4組の全8談話である。収集した談話データの文字化は、ザトラウスキー(1993)の文字化規則に依拠した。⁴⁾ 談話データの所要時間は、合計1時間2分58秒、総発話数3,464発話⁵⁾、総発話数に対する相づちの比率は、8名の合計で1,526発話、44.1%を占める。

【表1】「語り」の談話データの概要

データ	会話時間	参加者	参加者の関係	総発話	相づち	
A/B-1	16分32	JF1/JF2・女性/女性	大学院の同期生	897	354	39.5%
A/B-2	11分07	JF3/JM4・女性/男性	大学院の同期生	611	259	42.4%
A/B-3	14分33	JF5/JM6・女性/男性	会社の同僚	794	350	44.1%
A/B-4	20分23	JF7/JF8・女性/女性	大学院の先輩・後輩	1,162	563	48.5%

4. 分析方法

4.1 相づちの定義と分類

本研究では、「相づち詞」「相づち発話」「うなずき」「笑い」の4種の表現を一括して「相づち」として扱うことにする。「うん」「そう」「へえー」「なるほど」のような応答詞・感動詞・副詞などに分類される表現を、堀口(1988)を参考に「相づち詞」とし、「繰り返し」や「感想・評価」のような短い発話を「相づち発話」、頭の縦振りの「うなずき」、「笑い」という形式で示され、実質的な内容を含まない言語・非言語行動を「相づち」とする。

相づちの機能は、ザトラウスキー(1997)の「注目表示」⁶⁾と、今石(1993)⁷⁾を参考に分類した。まず、話し手が伝える情報内容を認知したかどうかで、「継続」と「承認」に二分した。さらに、情報内容を認知した上で表出可能な9機能を「承認」の下位分類とした。相づちの「発話機能」の分類と定義は、以下のようになる。

- I. 継続 先行する発話に暗示された意味を認めないまま、単に話を続けさせる。
- II. 承認 先行する発話に暗示された意味を認める。
 - II-①確認 先行する発話を繰り返して確認する。「ほんと?」「そうなんだ。」などを含む。
 - II-②納得 納得の意を示す。
 - II-③感情 興味や関心を示す。
 - II-④共感 相手と同じ感情をいんでいることを示す。
 - II-⑤感想 相手の言った事柄に対して感想を述べる。
 - II-⑥否定 否定的な気持ちや疑いを示す。「感謝」「陳謝」などを打ち消す。
 - II-⑦想起 相手の言った事柄に対し思いついたことを示す。
 - II-⑧同意 正しいという同意を示す。
 - II-⑨終了 話を終了してもいいことを示す。

4.2 相づちの談話展開機能の分類基準

相づちの「談話展開機能」とは、[先行発話—相づち—後続発話]という談話の流れを説明するものである。上述の2類9種の相づちの中で、どの機能を持つ相づちがどのように相手に働きかけて、談話を展開するかを分析する。

佐久間(2002:162)は、「接続表現は、二つ以上の言語単位の間位置して、前後の意味内容を関連付け、より大きい意味のまとまりとして結び付ける働きをする言語形式である。」として、以下の「接続表現の文脈展開機能」3類14種(佐久間2002:168)を設けている。

- A 話題開始機能 a1 話を始める機能 a2 話を再び始める機能
- B 話題継続機能 b1 話を重ねる機能 b2 話を深める機能 b3 話を進める機能 b4 話をうながす機能
 - b5 話を戻す機能 b6 話をはさむ機能 b7 話をそらす機能 b8 話をささげる機能
 - b9 話を交える機能 b10 話をまとめる機能
- C 話題終了機能 c1 話を終える機能 c2 話を一応終える機能

相づちは、接続表現のように意味内容の関連付けや情報を伝達する機能は持たないが、談話を先へと展開させ、後続発話につなぐ働きをするという点では接続表現と通じる面が

ある。そこで、談話展開における参加者の相互作用と発話内容の機能に有効な分析観点としての「B 話題継続機能」を相づちの談話展開機能の分析の枠組みとして援用する。

本稿では、「先行発話—相づち—後続発話」という関係における相づちを[X]とし、相づちの直後にくる後続発話を[Y]と称する。この[X]と[Y]の機能的な関係を「相づちの談話展開機能」と呼ぶ。それぞれの区分と定義は【表2】のとおりである。

【表2】相づちの談話展開機能の区分と定義

相づちの談話展開機能		
[X] 相づちの機能	[Y] 後続発話の機能	
x1 話をうながす機能 話が進むように相手をうながす。	y1 話を重ねる機能 前の話を繰り返し、同じ話を続ける。	y4 話を変える機能 前の話に対する反対の話を述べる。
x2 話をささげる機能 相手の話を続けさせないようにする。	y2 話を深める機能 前の話を言い換えて説明する。	y5 話を戻す機能 一度それた話を再び元の話に戻す。
x3 話をまとめる機能 相手の話をまとめて、しめくくる。	y3 話を進める機能 前の話に対する結果や評価の話を述べる。	y6 話をはさむ機能 前の話に関連する別の話を差し込む。
		y7 話をそらす機能 前の話を避けて、違う話をする。

佐久間(2002:168)の「B 話題継続機能」のうち、相づちが相手の発話にどのように働きかけるかという談話の相互作用の観点から、[X]相づちの機能をx1、x2、x3とし、先行発話(前の話)について言及している7つの機能を[Y]後続発話の機能としてy1~y7に分類した。[Y]後続発話の発話内容を分析する上で、佐久間(2002)の接続表現における「b3話を進める機能」と「b9話を変える機能」の定義を一部修正した。「前の話を切り上げて、違う話をする」接続表現の「b9話を変える機能」は、話題を転換する機能として考えられるため、「y4前の話に対する反対の話を述べる」と改めた。その理由は、相づちは、「参加者の態度を示し、談話の展開に寄与するが、話題の実質的な進展には特に寄与しない」(ザトラウスキー1993:74)からである。そして佐久間(2002)の「前の話の結果や反対の話を述べる」用法の「b3話を進める機能」を「y3前の話の結果や評価の話を述べる」とし、「y4話を変える機能」と区別した。なお、後続発話のy5、y6、y7の機能は、y1、y2、y3、y4の機能にプラスされる場合がある。⁸⁾

5. 分析結果

5.1 談話の展開パターンと[X]相づちの機能

従来、相づちの機能を先行発話に対する反応として規定するものが多かったが、相づちは話を展開していく上で、後続発話を導く機能を持っている。[先行発話—相づち—後続発話]の談話展開は、発話の働きかけと話者交代から3つのパターンに分類される。【表3】は、[先行発話—相づち—後続発話]という発話の談話展開を示すものである。

談話展開パターンのそれぞれの違いは、まず、パターンⅠとⅡは、後続発話の話者が「話し手」であるのに対し、パターンⅢは、「聞き手」による展開となる。また、発話の働きかけの方向が、パターンⅠとパターンⅡ、Ⅲでは異なる。パターンⅠの相づちと後続発話は、話が先に進む方向に作用するが、パターンⅡとⅢでは、先行発話の方向に作用する。

【表3】談話の展開パターンと相づちの談話展開機能

相づちの談話展開機能 [X]相づちの機能と定義	展開 パターン	談話展開			談話例
		先行発話	[X]相づち	後続発話	
x1 話をうながす機能 話が進むように相手をうながす。	I	A	B	A	A: 風が壊れちゃったのね。 B: うん。
		→	→	→	A: で、その後、ビンガが家に入って、
x2 話をさえぎる機能 相手の話を続けさせないようにする。	II	A	B	A	A: 風が壊れちゃったのね。 B: へえー。
		→	←	←	A: うん、屋根から落ちちゃったの。
x3 話をまとめる機能 相手の話をまとめて、しめくくる。	III	A	B	B	A: 風が壊れちゃったのね。 B: あー。
		→	←	←	B: それで壊れちゃったんだ。

注) 「A」は話し手、「B」は聞き手、「→」「←」の矢印はそれぞれの発話の働きかける方向を示す。

相づちの談話展開機能の[X]相づちの機能、x1、x2、x3の違いは、相手の発話にどのように働きかけるかによる分類である。

[x1 話をうながす機能]の相づちは、談話例の「B: うん。」のように、話を聞いていることを示し、話が進むように相手の発話をうながす働きをする。

[x2 話をさえぎる機能]の相づちは、「相手の話を続けさせないようにする」ものである。言い換えれば、話し手の伝える情報が、聞き手にとって予測に反するものであったり、否定的な立場であったりする場合、[x2 話をさえぎる機能]の相づちを打たれた話し手は、話を先へと進めることができない。談話データからは、聞き手の理解をうながすために、話の流れがさえぎられた場合(例2、例3)と、「感想」「否定」のような相づちによって話の流れがさえぎられた場合(例4)がみられた。談話例のパターンIIは前者の場合である。「B: へえー。」という相づちは、先行発話に対する驚きの「感情」表示である。話し手は、聞き手が示す意外さに気付き、「A: うん、屋根から落ちちゃったの。」というように「風が壊れた」理由を補足し、聞き手の理解をうながす。この場合、「B: へえー。」という相づちは、[x2 話をさえぎる機能]として働き、「A: うん、屋根から落ちちゃったの。」という後続発話を導き出す働きをするものと考えられる。

[x3 話をまとめる機能]の相づちは、「そこまでの話は分かった」とか「その話は知っている」というように、「相手の発話をまとめる」働きをし、主に「承認」とその下位分類の9種の相づちで示される。「分かった、知っている」ことの実質的な内容が後続発話である。談話例の「B: あー。」につづく「B: それで壊れちゃったんだ。」は、聞き手の理解表出の発話である。

5.2 [X]相づちと[Y]後続発話の関係

談話データから[x1 話をうながす機能][x2 話をさえぎる機能][x3 話をまとめる機能]の相づちと後続発話との関連を調べて、出現頻度を求めた。【表4】にその結果を示す。

[X]相づちの各機能別の出現頻度は、[x1 話をうながす機能]の相づちが全1,213例で最も多く、[x2 話をさえぎる機能]と[x3 話をまとめる機能]の相づちは、それぞれ32例と281例であった。[x1 話をうながす機能]の1,213例の相づちは、「話を進める機能」の後続発話に相関する関係を表している。

相づちの談話展開機能の[X]相づちと[Y]後続発話 (y1~y7) の関係では、[x2 話をさえぎる機能] の相づちで後続発話を導き出す例が 32 例、[x3 話をまとめる機能] の相づちで理解表出の後続発話につなぐ例が 85 例あった。パターンⅡの [x2 話をさえぎる機能] の相づちに後続する発話 y1~y7 は、「話し手」による実質的な内容であり、パターンⅢの [x3 話をまとめる機能] の相づちに後続する発話 y1~y7 は、「聞き手」による実質的な内容である。

【表 4】 [X]相づちと[Y]後続発話の関係

[Y]後続発話の機能 \ [X]相づちの機能	x1 話をうながす機能		x2 話をさえぎる機能		x3 話をまとめる機能	
y1 話を重ねる機能	0	0.0%	5	15.6%	18 (18)	6.4% (21.2%)
y2 話を深める機能	0	0.0%	12	37.5%	16 (16)	5.7% (18.8%)
y3 話を進める機能	0	0.0%	3	9.4%	28 (28)	10.0% (32.9%)
y4 話を変える機能	0	0.0%	3	9.4%	8 (8)	2.8% (9.4%)
y5 話を戻す機能	0	0.0%	0	0.0%	4 (4)	1.4% (4.7%)
y6 話をはさむ機能	0	0.0%	8	25.0%	7 (7)	2.5% (8.2%)
y7 話をそらす機能	0	0.0%	1	3.1%	4 (4)	1.4% (4.7%)
* 話を進める機能(継続)	1,213	100.0%	0	0.0%	196 (—)	69.8% (—)
合計	1,213	100.0%	32	100.0%	281 (85)	100.0% (100.0%)
相づち総数に対する割合 (1,526発話)	79.5%		2.1%		18.4% (5.6%)	

注1) 後続発話の「話を進める機能(継続)」は、単に話を続けるというものであり、y3「前の話に対する結果や評価の話を述べる」機能とは異なる。

注2) 「x3 話をまとめる機能」に対する「話を進める機能(継続)」の 196 例は、「話し手」による発話で、「聞き手」による y1~y7 の後続発話の頻度を()に示した。

[x2 話をさえぎる機能] の相づちに後続する発話 y1~y7 の機能の中で、最も多くみられたのは、[y2 話を深める機能] で 37.5% を占めている。次いで [y6 話をはさむ機能] が 25.0%、[y1 話を重ねる機能] が 15.6% であった。つまり、[x2 話をさえぎる機能] の相づちの使用によって、話し手に前の話を言い換えて説明させたり、関連情報を補足させたり、繰り返し言わせたりする方向に作用する割合が高くなるということになる。[x3 話をまとめる機能] の相づちに連繋する後続発話の機能は、出現率の高い順から [y3 話を進める機能] 32.9%、[y1 話を重ねる機能] 21.2%、[y2 話を深める機能] 18.8% であった。[x3 話をまとめる機能] の相づちの後には、情報内容に対する結果や評価の話を述べたり、相手の発話を繰り返して確認したり、言い換えて共感を表す傾向が高いといえる。[x3 話をまとめる機能] の相づちと y1~y7 の機能の後続発話は、話し手の伝える情報内容に一段落を付け、聞き手が実質的な内容で理解を示すものである。また、話し手にとっては、聞き手の理解が確認でき「話を続ける意欲を得る」(小宮 1986: 43) のものであると考えられる。

相づちの総数に対する [x1 話をうながす機能] の相づちの比率は、79.5% で、[x2 話をさえぎる機能] と [x3 話をまとめる機能] の相づちは、それぞれ 2.1% と 18.4% であった。[x2 話をさえぎる機能] と [x3 話をまとめる機能] を両方合わせても、談話全体の 20.5% しかない、という結果は、[x2 話をさえぎる機能] と [x3 話をまとめる機能] の相づちの使用に制約があることを意味する。つまり、[x2 話をさえぎる機能] と [x3 話をまとめる機能] の相づちは、情報内容の確定や情報内容の調整の段階で用いられ、情報内容が不確定な場

合に「句の切れ目であればどこでも打てる」（堀口 1997：62）というような[x1 話をうながす機能]の相づちとは区別される。

以下、[先行発話—相づち—後続発話]という談話展開のパターンⅠ、Ⅱ、Ⅲにおける相づちの働きと、後続発話に影響をもたらす相づちとはどのようなものなのかを検討する。

5.2.1 パターンⅠ [先行発話—x1 話をうながす機能—後続発話]の展開

[x1 話をうながす機能]の相づちは、先行発話に対し、聞いていることを示すと同時に、話が先へ進む方向に働きかける。相づちと後続発話は、「話が先へと進むように相手をうながす」ことによって、話し手は話を進めていくという相互関係にある。

- | | | | |
|-----|-------|---------------------------------|---------------|
| (1) | 89JF5 | で、2回目投げたら、 | |
| | 90JM6 | <u>うん。</u> | ↓ x1 話をうながす機能 |
| | 91JF5 | 風に当たって、 | ↓ (話を進める機能) |
| | 92JM6 | <u>うん。</u> | ↓ x1 話をうながす機能 |
| | 93JF5 | 落ちただけど、 | ↓ (話を進める機能) |
| | 94JM6 | <u>N</u> | ↓ x1 話をうながす機能 |
| | 95JF5 | 風が壊れちゃったのね。 | ↓ (話を進める機能) |
| | 96JM6 | <u>あ、「あ」「あ」「あ、なるほど。</u> | ↑ x3 話をまとめる機能 |
| | 97JF5 | で、今度はペンダーが家に入ってて、 | ↓ (話を進める機能) |
| | | ※相づちを____、後続発話を_____で記す。(以下、同様) | |

例(1)は、89JF5「で、(雪玉を)2回目投げたら、」というところから始まる談話例である。89JF5から95JF5は、聞き手JM6が[x1 話をうながす]ことによって、話し手JF5が「話を進める」という展開を示す。例(1)の相づちの推移は、90JM6ではうなずきを伴う相づち「うん」、92JM6では相づち詞のみの「うん」、94JM6では、うなずきのみで、それぞれ異なる形式の相づちを打っている。この種の「継続」の相づちは、「情報内容の不確定」の段階に示される。「情報内容の確定」の段階では、96JM6「あ、あ——、なるほど」のように、「延伸型」⁹⁾の「あ系」や「なるほど」など「承認」の相づちが用いられる。聞き手の情報受容の過程において[x1 話をうながす機能]と[x3 話をまとめる機能]の相づちの用法に、表現形式の違いがみられるといえる。

5.2.2 パターンⅡ [先行発話—x2 話をさえぎる機能—後続発話]の展開

例(1)では、「情報内容の不確定」の場合は[x1 話をうながす機能]の相づち、「情報内容の確定」の場合は、[x3 話をまとめる機能]の相づちが用いられていた。[x2 話をさえぎる機能]の相づちは、情報内容を確定した上で、「情報内容の調整」の場合に示される。

- | | | | |
|-----|-------|----------------------|---------------|
| (2) | 20JF1 | えっ、お父さんははじめからいないの？。 | |
| | 21JF2 | うん、は、いなかった。 | |
| | 22JF1 | <u>ほおー。</u> | ↑ x2 話をさえぎる機能 |
| | 23JF1 | 「うん。」 | |
| | 24JF2 | <u>お父さん仕事//なのかな。</u> | ↑ y6 話をささむ機能 |
| | 25JF1 | は—「あ」「あ」「あ。 | |
| | 26JF2 | <u>よく分かんないけど。</u> | ↑ y6 話をささむ機能 |

映像資料Aの後半では、父親の帰宅がひとつの出来事として構成されている。資料の後半を観た JF1 は、JF2 の情報提供の中に「お父さん」が登場しないことに疑問を持ち、20JF1 で「お父さんの存在」を確認している。21JF2 の「いなかった。」という答えに対し、22JF1 では、「ほおー」という驚きを表す「感情」の相づちを発している。そして、23JF1 で話の続きをうながしているが、JF2 は、JF1 が意外に思っていることに気づき、24JF2 で「お父さん仕事なのかな。」という見解を補足している。このような点から、22JF1 の「ほおー」という相づちは、24JF2 の「お父さん仕事なのかな。」という情報を導き出す機能を果たしていると考えられる。

- (3)
- | | | |
|--------|------------------------------------|---------------|
| 299JF8 | 花瓶が割れたのにー、 | |
| 300JF7 | | N |
| 301JF8 | ピングーが//「もともとお前のせいだ」みたいに、 | |
| 302JF7 | | 「うん。」 |
| 303JF8 | ピンガに//こう、怒ってるんだ。 | |
| 304JF7 | | <u>ふーん。</u> |
| | | ↑x2 話をさえぎる機能 |
| 305JF8 | こう、罪をなすりつけようとして。 | ↑y2 話を深める機能 |
| 306JF7 | | <u>あー//ー。</u> |
| | | ↑x2 話をさえぎる機能 |
| 307JF8 | なんか「やったのはお前」みたいな。 | ↑y1 話を重ねる機能 |
| 308JF7 | | N |
| | | ↑x2 話をさえぎる機能 |
| 309JF8 | だから、なんかね、<2>枕を投げるところが
すごい一瞬だから、 | ↑y6 話をささむ機能 |

例(3)の引用部分以前の会話では、「ピングーとピンガが喧嘩して、ピングーが投げた枕に当たって花瓶が割れた」話が語られている。JF7 は、303JF8 の情報提供に対して、304JF7 「ふーん」、また、305JF8 に対しては 306JF7 「あー」¹⁰⁾ という相づちを打って、JF8 の話の流れをさえぎっている。そこで、JF8 は、305JF8 で「罪をなすりつけようとして。」というふうに 301JF8 の発話を言い換えて説明し、307JF8 では「やったのはお前みたいな。」と 301JF8 の発話を反復して JF7 の理解をうながしている。さらに、308JF7 のうなずきに対しては、309JF8 で「だから、なんかね、」と切り出し、y6「前の話と関連する別の話」を補足している。この談話について参加者にフォローアップ・インタビューを行った結果、JF7 は、「自分が観た映像にどうつながるのかよく分からなかった」との回答が得られた。JF7 の有する情報と JF8 の話との関連性が低いため、304JF7 「ふーん」という疑いを含む「否定」の相づちや、308JF7 のうなずきが発されているものと思われる。

- (4)
- | | | |
|--------|-----------------------------------|--------------------|
| 291JF1 | {で、「ここに隠した」とかゆって、} | |
| 292JF2 | | { <u>嫌な奴。</u> } |
| | | ↑x2 話をさえぎる機能 |
| 293JF1 | { <u>絶対下の子ちくる//んだよねえ。</u> } | ↑y6 話をささむ機能 |
| 294JF2 | | {「そー」「そー」「そー」「そー」} |
| 295JF1 | { <u>うちの弟も絶対//ちくるんだよ、ああゆうの。</u> } | ↑y6 話をささむ機能 |
| 296JF2 | | {N} |
| 297JF1 | でー、ちくって、 | |
| 298JF2 | | 「うん。」 |
| 299JF1 | お父さんが、こう、戸棚開けて、 | |

例(4)は、292JF2の「嫌な奴」という「感想」の相づちによって291JF1の話の流れがさえぎられている。292JF2の相づちに対し、JF1は、293JF1と295JF1で自分の弟の話为例えに出して「下の子はちくる」という共感を表している。その後、291JF1でさえぎられた話を、297JF1で再提示して話を続けている。

以上、[x2話をさえぎる機能]の相づちは、例(2)、例(3)のように、情報内容に対する意外さや否定的な態度を示すことによって、話の流れがさえぎられる場合と、例(4)のような「感想」の相づちを受けて、話し手の意図した当初の話がさえぎられる場合がある。談話展開における[x2話をさえぎる機能]の相づちは、「情報内容の調整」の際に用いられ、情報を導き出す働きをするものであると考えられる。

5.2.3 パターンⅢ [先行発話—x3話をまとめる機能—後続発話]の展開

[x3話をまとめる機能]は、情報内容を確定した段階で示される相づちで、先行発話に対する理解を表す。後続発話では、得た情報の理解を実質的な内容で表すため、聞き手の会話への積極的な態度が示される。

- (5) 453JF7 パイプか//なんかくわえたから。
 454JF8 パイプ。
 455JF8 「そー「そー「そー「そー。
 456JF7 お父さんアイロンかけてるー。
 457JF8 ね?。 ↑ x3話をまとめる機能
 458JF8 パイプくわえてるとお父さんと思っちゃうんだ ↑ y3話を進める機能
よねー。

例(5)では、JF7とJF8の共通理解による話の場面で、「お母さんがパイプをくわえている」ことや「お父さんがアイロンをかけている」という登場人物の描写が話題になっている。JF7による453JF7、456JF7の情報提供と、JF8の454JF8、455JF8、457JF8の「共感」の相づちによって話が展開されている。JF8は、457JF8で情報内容を確定し、「ね?」という相づちを打った後、458JF8でJF7の話をまとめて「パイプをくわえているのはお父さんではない」という結果を述べている。[x3話をまとめる機能]の相づちを用いて[y3話を進める機能]の後続発話につなぐ展開例である。

- (6) 346JF3 それを、瓶を花瓶にしようっていう、
 347JM4 うん。
 348JF3 あれだった//らしくてね。
 349JM4 あー、なるほどね。 ↑ x3話をまとめる機能
 350JM4 アイデアとしては。 ↑ y2話を深める機能
 351JF3 「そー「そー「そー。

例(6)は、「花瓶が割れた」というストーリーの続きで、「父親が空瓶を花瓶にしようと思った」という情報を伝える場面である。348JF3の「あれだったらしくてね。」という発話に対して、349JM4の「あー、なるほどね。」という「納得」の相づちを打っている。348JF3の「あれ」という発話意図を理解し、350JM4でそれを「アイデア」と言い換えている。349JM4の「あー、なるほどね。」という相づちは、情報内容を確定し、「相手の発

話をまとめて締めくくる」機能であり、350JM4の「アイデアとしては。」は、「前の話を言い換えて説明する」「y2話を深める機能」である。

5.3 相づちの談話展開機能の[X]相づちの表現形式

談話展開パターンⅡの[x2話をささげる機能]と、パターンⅢの[x3話をまとめる機能]の表現形式を発話機能別に【表5】に示した。

[x2話をささげる機能]の相づちは、「感情」14例、「否定」6例、「感想」「想起」「確認」が各3例と、「承認」1例、「うなずき」2例がみられた。また、[x3話をまとめる機能]の相づちは、「承認」30例、「共感」24例、「確認」7例、「同意」6例、「納得」5例、「想起」3例、「感情」1例と「うなずき」4例、「笑い」5例がみられた。

【表5】[x2話をささげる機能][x3話をまとめる機能]の相づちの表現形式

	x2話をささげる機能		x3話をまとめる機能			x2話をささげる機能		x3話をまとめる機能	
感情	へえー。	3	うそ	1	承認	あー。	1	うん。	10
	うそ。	3					ああ。	6	
	おお。	1					あー。	6	
	おっ。	1					んー。	3	
	ほおー。	1					あー。	2	
	おん。	1					はあー	1	
	へえつ。	1					あー。	1	
	あれっ、おー。	1					ふーん。	1	
	おーん。	1					納得	あ、だからか。	1
	おーん。	1						あー、なるほどね。	1
否定	あっ、そお？。	2			ああ、なるほど。	1			
	いやー。	1			なるほどね。	1			
	ふーん。	1			うーん、なるほど、そっか。	1			
	うーん。	1		共感	そーそー。	6			
そうなのかなあ？。	1		ね？。		3				
感想 ※	懐かしい風景だね。	1			ねー。	1			
	嫌なやつ。	1			うんうん。	3			
	可愛い。	1			そーそーそー。	3			
想起	あー、そっか。	2	あ、そう。	1		そうだよ。	2		
	あっ、そうだ。	1	あっ。	2		そーそーそーそー。	2		
確認	あっ、本当？。	1	あっ、本当？。	3		NNそう。	1		
	あ、そうなんだ。	1	本当？。	1		んんん。	1		
	あ、そうだったんだ。	1	そうなんだ。	1		そうですよね。	1		
			あ、そうなの。	1	うなずき	N	2	NN	4
		あ、そうですか。	1	笑い			笑い	5	
同意			そう。	4	合計	25種	32	36種	85
			ん。	1					
			んん。	1					

※「感想」の相づちは、決まった形式がないため全体を1種類として数えた。

相づちの種類は、[x2話をささげる機能]が25種、[x3話をまとめる機能]が36種であり、[x2話をささげる機能]と[x3話をまとめる機能]の異なり数は57種であった。参加者は57種の相づちを用いて、話をうながしたり、話の流れをささげたり、話をまとめながら、談話を構築していることが観察された。

[x2話をささげる機能]の相づちは、合計32例であった。使用頻度が最も高いのは、「感情」の相づちで、延べ11例あるが、その表現形式は様でない。また、「否定」と「感

想」の延べ数は、5例、3例と少ないが、「感情」「否定」「感想」の相づちの場合、[x3話をまとめる機能]での使用頻度とは対照的である。

表現形式は、例(2)22JF1の「感情」(「ほおー。」)のように、積極的に情報を導き出すための形式もあれば、例(3)308JF7のうなずきように、聞き手の反応が不十分に感じられ、「話をさえぎる機能」として働く場合もある。話し手は聞き手の反応を見ながら話を進め、聞き手は疑いの気持ちを「否定」、思い出したことを「想起」、話に興味があることを「感情」などの相づちで示しながら、情報を導き出すのである。

[x3話をまとめる機能]の相づちは、合計で85例みられた。最も使用頻度が高かったのは「承認」の相づち群である。「承認」の30例のうち、10例ある「うん」は、相づちを打った直後に、情報要求する場合が8例あった。「あー」のような延伸型の相づちは、うなずきを伴う場合と伴わない場合がある。うなずきを伴う場合は、話し手の伝える情報に肯定の意を表すのに対し、うなずきを伴わない場合は自己内省的に働き、推測や予測の後続発話が見れる。次に多いのは、「共感」の相づち群であった。「そーそー」「うんうん」のような、同じ語形を繰り返す「重複型」の相づちや、「ね?」「そうだよね」のような形式が用いられる。「納得」を示す相づち群では、「なるほど」の使用が主である。

[x2話をさえぎる機能]の相づちと比べて、[x3話をまとめる機能]の相づちは、「承認」「納得」「共感」「同意」の使用に特徴がある。また、先行発話を「笑い」で受け、後続発話につなぐ例が5例みられた。「確認」の「あっ、本当?」や「感情」の「うそ」のような相づちは、[x2話をさえぎる機能]にも用いられ、後続発話で参加者のどちらかが直前の話に言及するものであった。

6. 結果と考察

本稿では、「語り」の談話における[先行発話—相づち—後続発話]という談話展開の相づちの「談話展開機能」を分析した。佐久間(2002)の「文脈展開機能」を援用し分析したことにより、以下のような結果が得られた。

1. [x1話をうながす機能]の相づちは、相手に話を進めるように働きかけ、[x2話をさえぎる機能]の相づちは、相手から情報を導き出す働きをする。[x3話をまとめる機能]の相づちは、話題の移行を円滑にするという働きをする。
2. 相づちは、先行発話に対し聞いていることを示すとともに、後続発話の流れを方向付ける機能を持つ。[x2話をさえぎる機能]の相づちは、①[y2話を深める機能]、②[y6話をさえぎる機能]、③[y1話を重ねる機能]の順に、[x3話をまとめる機能]の相づちは、①[y3話を進める機能]、②[y2話を深める機能]、③[y1話を重ねる機能]の順に、後続発話と密接に関係していることが認められる。

以上の結果から、相づちを採り入れる会話教育においては、まず、相づちが情報受容のどの段階で示されるのかを把握し、[x1話をうながす機能][x2話をさえぎる機能][x3話をまとめる機能]の使い分けができるように注意を払うことが望まれる。「どういう時に」、「どのような相づちを使うか」、「なぜ使うのか」を【表6】にまとめた。

【表6】情報受容の段階における相づちの発話例及び相づちの談話展開機能

情報受容の段階	相づちの発話例	相づちの談話展開機能	
		[X] 相づち	[Y] 後続発話
i) 情報内容の不確定	継続 (うん。うんうん。)	x1話をうながす機能	話を進める機能(継続)
ii) 情報内容の調整	感情 (へえー。ほおー。) 否定 (あ、そう。そうかな。)	x2話をさえぎる機能	y2話を深める機能 y6話をはさむ機能 y1話を重ねる機能
iii) 情報内容の確定	承認 (ああ。あー。) 共感 (そーそー。ね?) 納得 (あー、なるほど。) 同意 (うん。そう。)	x3話をまとめる機能	y3話を進める機能 y2話を深める機能 y1話を重ねる機能

- i) 情報内容が不確定な場合は、「継続」の相づちで、話が先へと進むように相手をうながす。話を正しく聞き取っていることが示され、話し手は話を先へと進められる。
- ii) 情報内容が予測に反する内容や否定的なものであったりする場合(情報内容の調整)は、「感情」「否定」の相づちを使い、話を理解するための情報を求めていることを示す。話し手は、聞き手が示す意外さや否定的な態度に気づき、y2 前の話を言い換えて説明したり、y6 前の話に関連する別の話を付加したり、y1 前の話を繰り返して、聞き手の理解をうながしつつ話を展開する。
- iii) 情報内容が確定した場合は、「承認」「共感」「納得」「同意」の相づちを使い、y3 前の話の結果や評価を述べたり、y2 前の話を言い換えたり、y1 前の話を繰り返す後続発話を付加し、情報内容の理解や了解を示す。話し手は、聞き手の理解の仕方が確認でき、後続発話や次の話題へと話を展開していく。

本研究で明らかになった[x2 話をさえぎる機能]の相づちを用いた「情報を導き出す方法」、及び[x3 話をまとめる機能]の相づちを用いた後続発話への連携を応用すれば、学習者のコミュニケーション能力の向上を図ることができるのではないと思われる。

注

- 1) 本稿の「語り」の談話とは、アニメーションのストーリーについて2人の参加者が語り合う対話のことである。
- 2) 「接続表現の文脈展開機能」とは、「文章・談話の文脈を先へと展開させ、完結し、統一のある全体的構造を形成して、情報を伝達する働きのことである。」(佐久間 2002 : 166)と定義されている。
- 3) 「ピングーと凧」は、渡辺文生(2003)の実験で使用されたものと同じ資料である。渡辺(2003 : 7)は、「ピングーと凧」を選んだ理由として、①「所要時間が5分と適切な長さであること」②「登場人物同士が音声でコミュニケーションを行っているが言語ではない」③「登場人物に関する前提知識がなくてもストーリーを理解できる」④「粘土のアニメーションなので画面の情報量が少ない(単純化された世界)」⑤「ペンギンの世界なので、インフォーマントの文化的背景に左右されない」の5点を挙げている。本稿の調査資料として用いた理由は、渡辺(2003)の5点の外、談話の参加者双方の情報量の差異による相づちの働きを見る上で適した資料であったことが挙げられる。
- 4) 文字化規則は、ザトラウスキー(1993)に従い、本稿ではうなずきと笑いの表記を加えた。うなずきは「N」で示し、うなずきの繰り返しは回数を数えて記す。うなずきを伴う相づちは、発話

の先頭に「」の記号を付ける(例:「うん」「うん」)。笑いは、単独行為の場合、{笑い}で示し、実質発話の中の笑いは生起箇所の始めと終わりを{ }で括る。なお、談話展開機能の前に記した「↑」「↓」の矢印は、それぞれの発話が働きかける方向を示す。

- 5) 「発話」は、「一人の参加者のひとまとまりの音声言語連続(ただし、笑い声や相づちを含む)で、他の参加者の音声言語連続(同上)とポーズによって区切られる」(杉戸 1987:83)単位であるが、本稿では、「うなずき」も、音声の相づちに類する表現とみなし1発話として扱った。
- 6) 「<注目表示>には『実質的な発話』と『相づち的な発話』がある。」(ザトラウスキー1993:70)とされているが、本稿では、「相づち」の分類として参考にした。II-②納得、II-⑦想起の相づちは、本稿で新たに設けたものである。
- 7) 今石(1993:99-100)は、「情報伝達の過程」における相づちの使い分けについて、「聞き手が話し手の情報伝達の意図を確定した場合」と「不確定の場合」に二分し、相づちの機能を「理解している信号」と「理解している信号+態度」に分類している。
- 8) 本研究の談話データにはなかったが、例えば、「さっきもお父さんのペンギン怒ってないじゃん。」という発話は、時間的背景を表す「さっきも」という表現を含め、y6「前の話に関連する別の話をはさむ」機能を持っていると同時に、「別の話」が「y4話を変える機能」も表すため、[y6+y4]に分類される。
- 9) 本稿では、「うーん」「あー」のように、相づちの形式の母音の拍が2拍以上の長さで発話されるものを「延伸型」の相づちと呼ぶ。
- 10) 例(3)の306JF7の相づちは、うなずきを伴わない小さな声で発したもので、話の流れに影響を及ぼすものであると判断した。相づちの音声については今後の課題としたい。

参考文献

- 泉子・K・メイナード(1993)『会話分析』くろしお出版
- 伊藤博子(1993)「談話の指導—バックチャンネルからの展開」『日本語学』第12巻第8号
- 今石幸子(1993)「聞き手の行動—あいづちの規定条件—」『阪大日本語研究』5 大阪大学文学部日本学科(言語系)
- 小宮千鶴子(1986)「相づちの使用の実態—出現傾向とその周辺—」『語学教育研究論叢』第3号 大東文化大学語学教育研究所
- 佐久間まゆみ(1992)「接続表現の文脈展開表現」日本女子大学文学部紀要41号
- _____ (2002)「3接続詞・指示詞と文連鎖」『日本語の文法4複文と談話』岩波書店
- 杉戸清樹(1987)「発話のうけつぎ」『談話行動の諸相:座談資料の分析』国立国語研究所報告92
- ポリー・ザトラウスキー(1986,1987)「談話の分析と教授法(I)(II)(III)—勧誘表現を中心に—」『日本語学』第5巻第11号、第12号、第6巻第1号
- _____ (1993)『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察—』くろしお出版
- 堀口純子(1997)『日本語教育と会話分析』くろしお出版
- 松田陽子(1988)「対話の日本語教育学—あいづちに関連して—」『日本語学』第7巻第13号
- 水谷信子(1984)「日本語教育と話しことばの実態—あいづちの分析—」『金田一春彦博士古希記念論文集』第2巻 三省堂
- 渡辺文生(研究代表者)(2003)『日本語学習者と母語話者の語りの談話における指示表現使用についての研究』科学研究費補助金(基盤研究(C)(2))研究成果報告書

本稿は、2004年6月提出の日本語教育研究科修士論文『韓国人日本語学習者による日本語の相づちの談話展開機能の分析』(未刊)の一部を加筆・修正したものである。本稿および修士論文のご指導を賜った佐久間まゆみ教授をはじめ、川口義一教授、小宮千鶴子教授に深く感謝申し上げます。